平成 19 年度　修士論文

現代生活における漆器の使用に関する研究
- 情報提供の場としての企画展の実施を事例に -

手塚 雪香

現在、漆を取り巻く環境は厳しいといわれて久しく、産地や漆器産業関係者は今後の対応に試行錯誤している。一方で、現代では食や住環境の安全性が叫ばれ、持続的な社会を目指すための循環型社会の仕組みが必要とされるなど、漆の特性はそれら時代的要請に適するものとして今後も使われるべきものといえ、漆の価値はますます高まると予想される。

以上のような現代の状況を踏まえ、漆器利用の現状と漆器に対する消費者の認識を明らかにしたうえで、今後の漆器の利用に繋げるためにどのような手立てを講じることができるのかを、人材、製品、情報提供などの点から検討し、それら課題を解決するため、特に情報提供の必要性に着目し、中でも博物館における企画展での情報提供を有効な手段と考え、さいたま市立博物館において 2007 年 4 月 28 日から 5 月 20 日まで、企画展「ｊａｐａｎうるわし－漆がひらく わたしたちの暮らし－」を企画・開催した。本研究は、企画展そのものを研究の成果発表の場ともとらえ、また、発表成果に対する来館者の評価や展示内容に対する意見を収集し研究成果に加え、企画展での情報提供の有効性を検討することを目的とした。

写真：企画展のちらし

研究方法は、文献調査、関係機関へのヒアリング、試行実験としての企画展の開催および、企画展におけるアンケート調査を用いる。アンケート調査では、企画展の鑑賞者に対し、①基本属性と来館の情報源、②漆器の所有と漆器に対する認識、③企画展に対する評価の３点について聞いた。

企画展の展示に対しては、65%の人が展示を見て勉強になったと回答していることから、学習型の展示という評価であった。より多くの史料や情報の展示が求められていたことからも、企画展では多くの情報を受け取ってもらうことができることがわかった。更に、展示を見て気づいたことや新たにわかったこととして漆の特性が挙げられており、情報提供の場を設けることで漆器の長所などを知ってもらうことができた。日常的に漆器を使用できない理由の一つとして扱いの難しさが挙げられるが、漆器の安全性や丈夫さといった特性が分かり気軽に使いたい、という意見や、これまであまり漆器に触れる機会のなかった人の 66%が展示を見て漆器の使用に好意的な考えを持ったことから、情報を得たことで使用への前向きな気持ちをもってもらうことができた。また、今後目にするときは以前よりも興味深く見られると思う、という意見が表しているように、今回の企画展が漆に興味をもつきっかけとなり、今後の漆器との関わりへも影響することが予想される。来館者からは、漆のよさを見直すような展示やイベントの継続を期待する意見もあり、企画展による情報提供は、漆器に対する興味関心を喚起できたという点において、情報提供の場として有効であったと考えられる。